

2018.6.2

雪村顕彰会が発足、記念シンポジウム開催

雪村顕彰会設立総会が開かれました

雪村顕彰会設立総会が市文化センターを会場に開催されました。県議会議員ら多くの来賓を代表して、県教育委員会の入野浩美文化課長、本市の綿引義久副市長、市議会の高村和郎議長、茨城新聞社の小田部卓代表取締役社長が挨拶をされました。

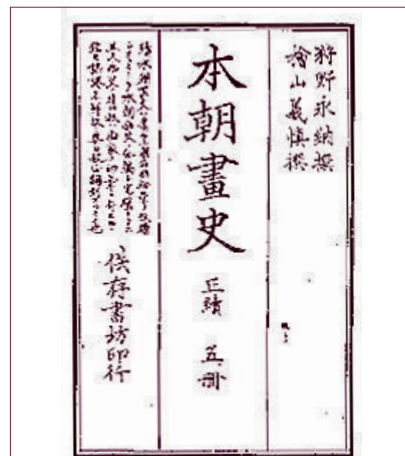
顕彰事業として、①雪村に関する調査研究 ②機関誌「雪村」の発行 ③講演・講座・シンポジウムの開催 ④会員・一般向け視察会の実施 ⑤雪村伝承地との連携事業等、を考えています。特に、江戸時代の資料に残る下村田の屋敷跡の特定や発掘などの学術調査を進めることを大きな目標にしているとのこと。会長の富山氏は「顕彰会活動を通し、無い物ねだりではなく、画聖・雪村というあるものを資源として最大限に生かしたい」と力強く述べていました。



▲総会には本市市議会議員も多数出席されました



雪村周継自画像（部分）※複製（本市歴史民俗資料館大宮館所蔵）



『本朝画史上巻』狩野永納編
出版者佚存書坊
原本：国立国会図書館

雪村周継とはどんな人物なのか

雪村周継は、雪舟と並び称せられる室町時代の画僧です。雪村は、15世紀末頃に常州（常陸国）部垂、今の市内大宮地域に生まれたと考えられています。

江戸時代前期に京で活躍した画家狩野永納が書いた画家伝『本朝画史』には、雪村は佐竹氏の一族として部垂の村田郷に生まれたが、父は側室の子を愛し廃嫡されたため僧になったこと、生まれつき絵を好んだことなどが記されています。

「僧雪村」諱ハ周継、鶴船翁老ト号ス 佐竹ノ一族ニシテ 而常州部垂ノ村田郷ノ人也（『訳注本朝画史』狩野永納編 笠井昌昭・佐々木進・竹居明男訳より）

近年の研究では、雪村は増井（常陸太田市）にある臨済宗の名刹正宗寺で禅僧としての修行をしながら画も学び、その後会津に赴き、さらに小田原・鎌倉を遍歴して再び奥州に戻り、最晩年は三春の雪村庵（福島県郡山市）に隠棲して、90歳近い高齢で没したとされます。この間、会津の蘆名氏、小田原の後北条氏、三春の田村氏などの戦国大名、小田原早雲寺や鎌倉円覚寺の禅僧と交わった

ことが分かっています。雪村は西国を訪れることなく、関東以北の臨済宗寺院や交流のあった戦国大名の家に所蔵された画の名品を見て多くを学び、誰の真似でもない独自の画風を身につけたと考えられています。雪村の画は洗練されているながら遊び心にあふれ、見る者を魅了します。尾形光琳をはじめとする琳派の画家たち、そして岡倉天心が率いた明治の画家たちも、雪村作品から多大な影響を受けています。

下村田には市の史跡「雪村筆洗いの池」があり、幕末の水戸藩士加藤寛斎が遺した『常陸国北郡里間数之記』には、人々が雪村の住居跡を今でも雪村屋敷と呼んでいること、雪村は近くに湧き出す泉水を画に用いたので、「雪村面影の井」あるいは「硯の井」と呼んでいる、と記しています。

「画仙雪村翁 雪村翁ハ下村田の産也 畫名天下ニ轟す土人 其姓氏を詳にせず画翁の屋敷述西の方山ニ着て古迹を遺す里人雪村屋敷と唱ふ」（『常陸国北郡里間数之記 卷之一』水城古文書の会編集より）



「常陸国北郡里間数之記（一）」
原本…国立国会図書館公開収録
加藤寛斎著

シンポジウム約300人が参加

【基調講演】

基調講演として、昨年雪村展を開催した東京藝術大学大学美術館の古田亮准教授が「雪村作品の価値と魅力に迫る」を演題に、①謎の画人・雪村、②雪村の評価と継承、③雪村作品の魅力、という3つの視点から多くのスライドを交えながら分かりやすく講演されました。

古田准教授は、「500年前に遡ることもあり雪村の人物像についてはその生没年さえも詳しく伝わっていないが、現存する作品数が約300点と極めて多くあるので、作品を頼りに雪村の人物像を深く理解し、多くの

人に関心をもってもらうことが出発点である。」と力説されていました。

また、「西の雪舟、東の雪村」と対比しつつ、雪舟に比べその人物像は謎に包まれている雪村について、これまで500年の歴史を紐解きながら、特に江戸期の狩野派や尾形光琳による継承の姿が浮き彫りにされました。明治期の美術家、岡倉天心が東京美術学校で画学生に語り伝えた「日本美術史」では、「雪村は雪舟と阿弥派との間にありて、雪舟を正面とすれば、その裏面を画けり」とし、その画風を「自由」「無頓着」「遊び」と評価しています。



▲古田亮准教授の講演

【パネルディスカッション】



「今なぜ雪村なのか」をテーマに4人のパネリストが参集し、討論が行われました。雪村に関係する代表者として、福島県三春町歴史民俗資料館主任主査兼学芸員藤井典子氏、臨済宗円覚寺派正宗寺住職木村恵開氏、雪村庵保存会会長橋本孝義氏、長久保赤水顕彰会会長佐川春久氏がパネリストとして壇上に立ち、それぞれの視点から雪村に対する考えを伝えていました。

コーディネーターには、雪村顕彰会会長富山章一氏が雪村に対する考えを述べつつ、4人のパネリストの考えを引き出しながら、興味深い討論を展開していました。



※文は雪村顕彰会の後藤弘文会員、写真は飛田隆一会員が担当しました。
※記事に関する問い合わせは雪村顕彰会、富山章一（080-1156-8604）までお願い致します。
※雪村顕彰会への入会案内は市教育委員会文化スポーツ課（0295-53-6500）が窓口となっています。